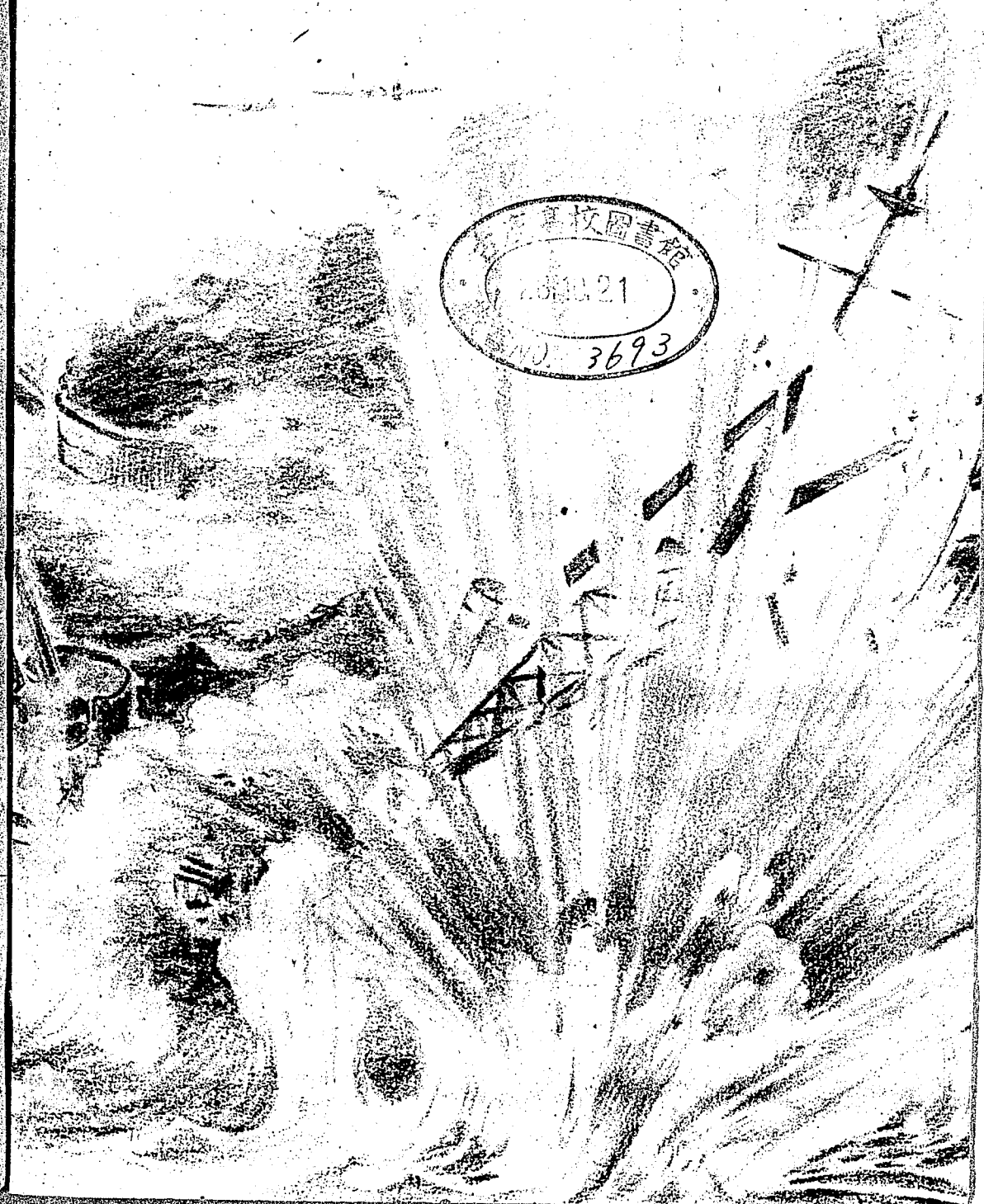




291
27
1

東京大学図書館
238821
NO. 3693



中根七郎
贈

叶如中

切本が成爲す本才 知中不担ん 終小齋折せ
と才の 治材上り 世に知らるる史料 少なき事
之下 珍りしものを保存し 一月で 切本を 考へて 必要
とすに 信下 切本を 九年の 一系を 値せられし 事
に 信下 在り也

元来史料に 保存せられし 往二 恒減する 事知れ
た 況し ぬ 欠陥れたる 事 如之 世に 完全なる
事 史實を 存せし 事 知られし 事 所有
傳りし 事 史實 後 全一 事 あり 之を 保存し

此蹟を信じて王宮に於て修す所也
殊に心におもはるる姫やおはるる
少山は雲の持を回らるる
ある言ひにおかしくも
之に致る存はるる
まらふ人の御書を
此蹟を信じて王宮に於て修す所也
殊に心におもはるる姫やおはるる
少山は雲の持を回らるる
ある言ひにおかしくも
之に致る存はるる
まらふ人の御書を

左の御書

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

山をさす

此續の行は... 山崎の持... ありき... 我に... 主... 秋... 古... 何... 今... 所... 以... 終... 終... 終...

終... 終...

終... 終...

終... 終...

終... 終...

終... 終...



京都市立第二高等女子学校
元
中根文庫

(山本惠太郎夫人の書簡に見易く様々改訂)

拜啓定例様より拜承仕候蒙 希若真さすこと希遠和之
由由驚入候 昨今の希徑道如何波為在候哉事 向上候
希苦痛之希病症とも親定て 御生之様之希因り不及
申張者病之 希心等左社と奉拜察候申上候事也
也 希登御事と修得と何卒高 希療養一日と速
希由是日以遊修と事 祈上候
恐入修得と希人さまと、希病人さま、希希久希遊聲
成頂度願上候 先不承教一結之希見舞上候
草々如斯之希候候 敬呈

四月廿四日(昭和九年)

山本惠太郎

中根文庫
希侍大

再啓

尊宿新有拜見其新なる名僧の存せし事存不申
殊に才井の答留錫指遷 化遷跡ありし事未可
承知不仕過し候懐歎次第申せ候 今所温泉
（冷泉）にて御承知の如く二つあり新泉場より大湯候
候と申者何れも姻戚（遠縁）よりなかりある者不詳候
碑に温泉場 敷地内あり候にせやと存候が如何候
に有威興隆の一台中一尊帰御し未度人願察候
候（き）甘折碑前へ禮拜 致度ものと存候申候に如何候
據に能蹟尊宿よりて開明成頂候事為地方 殊に
池邊に為島上へ嬉敷相感申候又其他 小山藍崎特
に言河原祥源寺に造り申候 あり高川原氏に事

亦新宮本宮に梅 氏小縁故存す如く御記事非常
に興 味深し御調査御教書に御苦勞感 銘不
堪候玉稿又祥源寺に御論古書 寺院初三所村
後場にて一書不御許頂す 保存させ度ものと存
候尊稿の事 高池所後場の人々未拜承無之
候字左候し 所表、通信の序に注記を候一遺し
度存居申候 御稿本は近日中御返啓不仕候間
御承知願上候様具 表敬意拜見を御許頂候仕合
候玉稿の事 表敬意拜見を御許頂候仕合
奉拜御候

(巻末)

山本東大守大人と古登川筋を第一流の人物を
早議有り文字有る紳士たり 郷土を去りて大坂に開
居せらるゝとて七十七を越えたる老翁たり 合意して東大
守の學士たるを言葉界りし梅地せらるゝ 幸存知の旧友
今存すよの大人 之より在り 東大守の篇よりおれり大人
を徳とせしむる

- 一 東大守の事
- 二 厚原作治守の事と記す
- 三 津田長四守の事
- 四 古登川上流の事
- 五 地誌の管見

版を聴き仰請喜随喜よ其筆下なり知らすか
為に和尙の仙化を同女より遠近無嘆廿二のち一
斯を忘りくの申に叙す言われ其三年虚の有り一
かた女解を述て其墓塔の印にありたるが
一々香花を千向る者今に至りて其地を絶たす
文化十一年のころ古徳海の隆師上野教員より
有りて友人との贈答歌集中に

惠澤法師の身まかり後三十年ちか経ぬるに
の果てて(伊賀の人)雪月と云ふ人(か)人の歌あらん
かへりてたゞいほむお世に讀置かれ詩歌ともを
サけよ頼て返して後とも消息の真に斯たん
君なくも後かたえて法の師の言を置かぬと見え

は人のまろしきとみゆとみふるに廿七の思ひ走り

惠澤法師の住けり跡をたれり

かまの及同き(年)一法師の住けり跡をたれり

かの津より月すれき山陰に志つてく住やまらん

みくまの海ま山陰に志つてく住やまらん

右に依れし和尙の和歌を能く漢詩にのせられたり
歌の前書に上れし歌書より雪月と惠澤和尙の遺稿を
られたるなり雪月より歌を信じて遺稿を返り来り
然れと申の上野を訪りて残存記録を詢したるに遺稿
惜む一

又和尙自筆の詠草を贈り約束したるに拙筆に
寄りてしるに廿七の思ひ走り

東原僧の自ら書けり詠草を参らせんとす約一丈二
か二三尋ねおのれれや年徑ぬれおあらぬ竹の足見
菊の末得す又たの便を待て送られたんかこの惜むと
人の思ふらんかこの惜むと

此の葉を二つ惜まん諸君かたき思ふ友と切す

又

古歌の玉升き元定とくく人の顔ありたの如く元定と塔徳
田仔皆外宮の神宮より天保嘉永の比古座浦小澤在り
一こことあり書けり

東原首座、オウキヤオカケレ、コトも嘉永元申トレ

六十四年、アツラセ給ヒレ、秋懐旧ノ歌ヨヨミニ書

ま、たもすうか秋を思ふら、ま、たもすうか秋の念はるこを

和向、白隠門下十哲の一人たりと言傳ふ昭和十年一月十四日
京都の向古英宗禪師熊野巡錫の途次古地所の祥源寺
に訪ふ住持と相推す、古座川の情景を探られ、とま親
しく和向の墓前と神拝し短冊に書こしを託す事曰く

古座崎中拜古塔 鉢浴深雲探真珠

と墓碑の存在を所温泉有り而して和向の跡跡跡と云ふ故
く句之が及びたりか此句意より禪師も仰慕せられたるを記す
一

古座より和向を敬古くも僧侶たりしと想像するは和
向の事跡を之を明し難く依り同見たり所を託しその昔を思
ふ云耳

和向の碑古の如く

天正五丁

新洲直澤首登

一箱月二十三

松陰寺徒

以上、昭和十一年一月迄、調査、依

昭和十九年三月十八日伴高踪、著近世時人傳、詩、収
ル所中江藤樹、具原益軒、初碩、學名士淑女高僧、等、
中、惠澤和尚、傳、ア、著者高踪、大日本人名辭、著、

伴高踪、有名、國學者、著、名、漢書、用、日子、ト、稱、近

江ハ、情、一、蒙、富、子、ナリ、シ、リ、文、雅、ヲ、好、ミ、京、師、ト、言、フ、高、踪、
學、ヲ、有、名、長、伯、ト、學、ト、後、ト、武、者、ハ、路、美、岳、ト、シ、ル、ハ、天、岳、
蒙、ク、後、獨、リ、古、學、ヲ、研、究、シ、遂、ニ、一、美、ヲ、成、ル、文、章、和、歌、
ヲ、以、テ、一、時、ト、鳴、ク、當、時、平、安、於、テ、其、聲、澄、月、慈、延、ト、世、島

後トナ併ヤ録レテ曰天王ト曰京師又伸、辺、住、其、居、田、

廬ト稱、故、自、關、日子ト稱、不、傍、遊、著作、事、ト、東、漢、學、ヲ

美、シ、且、伸、理、ヲ、究、ム、林、泉、院、カ、如、上、ト、方、外、ノ、交、ヲ、結、ッ、上、ノ、書、

詩、ヲ、作、リ、シ、ニ、短、ク、其、詩、ト、曰、ク

志、未、幾、却、著、書、成、 祇、道、屏、居、遂、情、情、 景、是、然、田、雨、不

得、 長、邊、筆、兼、四、時、科

ト、高、踪、乃、ト、記、シ、曰、此、詩、一、予、ノ、心、實、録、ナリ、其、人、ト、高、踪、

順、如、法、院、ノ、空、殊、ニ、熟、遇、ス、文、化、三、年、七、月、廿、五、日、致、ス、語、東、智

恩、院、ト、交、シ、年、七、十、四、著、ハ、所、田、耕、筆、近、世、時、人、傳、同

續、國、文、世、ノ、論、譯、文、同、論、勝、地、吐、懷、篇、加、具、ト、リ、の

古、今、大、和、物、語、補、翼、抄、田、日、文、草、田、日、味、草、田、日、早

苗、増、補、題、字、要、解、卷、訓、抄、評、語、要、解、萬、葉、類、集

元は中三ノ也、其家ノ禄も減ヤサ、さちから相傳へたり、
其人は西行をまねふりしおらり、おのりから趣似たりと云ひ
おのり、歌をちからやりか、地傳ヤサし、梅井氏より

を依り、和尙ノコト又略知明シ、久シキ調査、身偶然、コト、歌、
ナレ、事限リ、ナレ、時、注志、マ、キ、能野、又、行、伴、因、ノ、國、を、著
書、和尙、ノ、コト、ヲ、既、シ、タ、レ、點、ヲ、寫、詞、シ、タ、又、等、ヲ、著、シ、レ、

一 能野巡覽記ニナリ 玉川全統先生、以著、寛政六年、
り、惠、厚、和、尙、ノ、化、化、天、明、三、十、年、ヲ、離、レ、僅、一、十、年、治、リ、時、ヲ、句
フ、ス、レ、和、尙、ニ、ト、ナ、レ、保、レ、巡、覽、記、ニ、三、山、巡、拜、ノ、街、道、ヲ、著、シ、
タ、ル、也、和、尙、ノ、居、リ、タ、ル、月、野、津、村、及、リ、サ、リ、シ、ナ、リ
ニ 行、伴、傳、令、ノ、記 又、保、十、年、完、成、知、外、傳、以、大、著、編、

タリ、續、風、土、記、著、述、ニ、參、照、シ、タ、ル、著、者、ノ、中、ヲ、點、查、シ、タ、ル、キ
ヲ、以、テ、古、座、川、筋、ヲ、調、査、シ、タ、ル、ナ、リ、月、ノ、津、村、ノ、名、ヲ、オ、ノ、ケ、
温、泉、ヲ、記、シ、テ、和、尙、ノ、碑、ヲ、記、シ、タ、ル、或、ハ、大、座、屋、ノ、書、上、ノ、如
キ、類、ノ、漏、レ、シ、タ、ル、カ、和、尙、ノ、名、因、ヲ、好、マ、シ、信、ノ、山、村、ノ、隱、棲、シ、タ、ル、
ノ、其、地、方、ヲ、モ、名、傳、ナ、ル、ヲ、和、サ、リ、レ、カ
三 能野ノ史ニナリ
四 東、山、集、新、法、ニ、ナリ
五 古、座、川 在、リ、海、村、キ、著、ナ、リ、又、ニ、モ、ナリ
六 古、座、川 史、ニ、有、リ、ヤ、著、ヲ、隱、ヤ、シ
七 行、伴、傳、土、抄、傳、家、ノ、傳、止、傳、一、面、寫、シ、タ、ル
八 本、國、歌、人、傳、知、伴、因、人、物、法、南、紀、人、物、法、ニ、ナリ
九 古、座、川、著、書、中、記、述、ヤ、ラ、レ、サ、リ、故、ニ、他、年、中、原、傳、和、尙、月、野

瀬村、隠棲ヲ否定スルニ、生ヤルナキマシキ事ナリ故ニ現ニ明
ラカテトクニ史ニ言フ南明ニシテ埋蔵ヲ御宗ニタテテ也（昭和九年
三月廿四日東京會、終日東京市上車路茶路不流所ニ十
九番地ニ於テ中根七郎談ス）

尾崎作次郎氏ノ事ヲ記ス

予明治廿九年二月、縣廳ヨリ東京妻籠郡役所ニ、吏ニ轉任シ、其十一日知
款ニシテ發シ、翌年三月新官ニシテ着ク。

當時新官所ニ於テ富豪者若干人、其中最大ナルモノニテ、曰ク尾
崎作次郎、曰ク植村新十郎、曰ク中谷利一郎、三氏ノ富相此有リ
テ殆ント甲乙ナシト稱ス。而レテ三氏ヲ唱ヘントキ、尾崎氏常ニ其稱首ト
シ、蓋德性入リ伏スモノアリ、陰德勢力カク有ルニ依ルニ云。

尾崎氏、木村マサトシ、志古ニ山崎村ヲ有シ、相公物、海邊ニ揚子有
シ其財積所ノ南東角ニ銀行業ヲ営ム、後年銀行ヲ大同銀行
ニ合併シ、海邊ニ揚子ニシテ船所ヲ移シ、炭坑ニシテ増益ス、而シテ
林業ニキテ左ノ日記アリ

尾崎作次郎氏ノ事ヲ記ス

又岡、作次郎氏社年、頃所ノ書後トナリ、後本村高トナリ。曾テ其世
ト先ト其、車業ニ失致シテ業ヲ破リ、債務難滞ノ法ナキニ至ル。此ノ時テ
親戚ノ謀リ、家業ヲ分崩スルコト、一日債権者ヲ集メ、其窮状ヲ訴ヘ、
全財産ヲ提出シテ、其方一ニ償ハント請フ。誠意有テ之ヲ過シ、涕泣眼腫
ヲ洩ス。一々相顧ミテ憐愍タカモ、之ヲ久ラス。時ニ作次郎氏ノ進メテ曰ク
既理ハ詰ナシ、其君年正ニ社ナリ、宜ニ斯ノ如クシテ終ルモ、ト云フ。若シ今ニ
マ償ンケラ、必再始期ナレトモ、親戚ノ諸君何ソ一辭事ノカヲ為サザル、
先ッテ其債権ヲ放棄シ、以テ業ヲ復活セシムル便ニセント、而レテ其債権
額額一額カツテ取ラセ也。衆ニ之同キ奮然トシテ之ニ賛同シ、一物ヲ取ラズ
トテ退ク。此意外、村ノ親ミ親戚相告メ業ヲ援助スルコト、感激シテ
曰ク一族唇味カク思フ志ニマラスト、其業ニ係リ過リ思フ辭ス。此ノ時テ
業ノ改善ヲ行ヒ、親戚ト共ニ取扱フ所ノ木材ハ皆テ、唇味カク在リ

輸レ、良材清濁ニ相違ミ、左頭年ト共ニ股盛トナリ、時人曰ク陸徳勝
ラレニナリト。惜イカク人ヲオクニ名ヲ遺ス。
又岡ノ、岡崎氏ノ銀行ノ入金ヲ借リケル者、家業ノ衰ハ、難滞不能トナリ、
所存ノ高貴債券ヲ提供シテ、債務ノ整理セリ。後、其債券ノ割増
第一等ノ當業ニシテ幸福ヲ獲リ、其時氏ノ女前増金ヲ以テテ其業ニ
帰リ、情ハ色ナリ、旧主ノ為メニ積息スルコトヲ請テ、潔ク其恩ニ感シ、
義談ト謂フナキ也。
明治〇〇年作次郎氏ノ遺財ノトキ、新室ノ前ニ女子教育ノ振興ヲ命ぜられ、
トレ、數地若手及レ建公館ヲ以テ其業ヲ子ノ母ニ守留シ、其會館ノ校舎平
也、後縣立ニ移ル。其時其女恩ニ感シ、徳化ヲ新室リノ福ヲ為シカケル。
予ニ祖妣ノ自ノ節ヲ何リ尊卑ヲ志シ、其業ヲ守リシコトヲ其祖考氏ノ
ノ願ニ、乃之ヲ唇味カク思フ、其所有債券ニ歸ス、以テ其業ヲ日ニ

盛大なり、須川元吉等、亦其意を満す、是れ當時氏ノ積徳ニ
果報ヲ獲ラレタル也ト、傳者吾國華界ノ説疑ッハカラサレ也。
作中ノ意ヲ平レ、即ち是れ其後ノ際ニ及テ、孫某君乃祖ニ似テ徳
念アリ、今之至リマテ家業ヲ衰ハスナ、其語ニ曰ク、積徳ノ功能廣ク
ト信ス

津田長四郎氏小傳

明治二十年頃より大正四年に至る間、新吉野ニ於テ中心勢力ヲナ
シタル者ヲ舉ゲシ、其最トシモノヲ數テ、津田長四郎氏トス。當時所内ニ
政事ヲ議論スルニ二派アリ、其一マ中心會派トス、此則三藩ヲ筆頭
トシ、岡田謙一郎、大野八十郎、宮本守中、山内平次郎、野本二郎、
等ヲ擁護ス。其二マ會業派ト稱シ、津田長四郎、牛耳ヲ把リ、植木
保太郎、赤羽謙一郎、林實治、等ヲ優レ、柳澤、田原齊ニシテ客將トシ、
是レ海軍中將ト結ビテ其勢力半平ニシテ下リ。更ニ所内ニ在リテ其對
シテ家業派ト稱シ、植木新十郎、西園治、松江武二郎、等ヲ擁護ス。其
時、津田長四郎、比肩シテ、獨リ中心會派ニ
加シテ、其力ニ比肩スルニシテ、會業派ノ力ヲ以テ優レ、中心會

派の辯論のハ雄の當り所會議壇の台座ヲ振つ。而して中心會派の在
在野黨のハ群衆の意ヲ固く、官業派の厚々以政ヲ握り、商業
者界のハ收攬シテ、相對峙ス。

斯クは田氏の勢力年々加わり、教育者界、紳士、警察官界及各
都府の方面に展つ。時々專横ヲ以テ之ヲ目スモノアリ。然レト雖トモ凡所
ノ事業、其大なる者ハ其力に依リテ成ル。其ニニニ數あるニ、彼ノ新宮中
學校ハ西條治縣會議員時代ノ産物ニシテ、其時女學校ハ實ニ原
崎作次郎ノ會社に依リテ成リタリ、原崎銀行ハ原崎作三郎ノ特ニ
經營ニ成リ、新宮銀行ハ植村新十郎ノ主カレシモノ也。株式組織ニ成ル
何レ津田勢力ニ參考畫レシモノナカラスト同ク。而レテ右等ノ外其尤ナ
キモノハ新勝鐵道加設ノ一大事業ナリトス。此鐵道ハ熊野中心地
ノ發達其界ノ利便、交通運輸界ニ便シ、更ニ相可和歌山間ノ通

紀勢鐵道建設ハ一原動力トナリタルヲ忘ルヘカラス也。

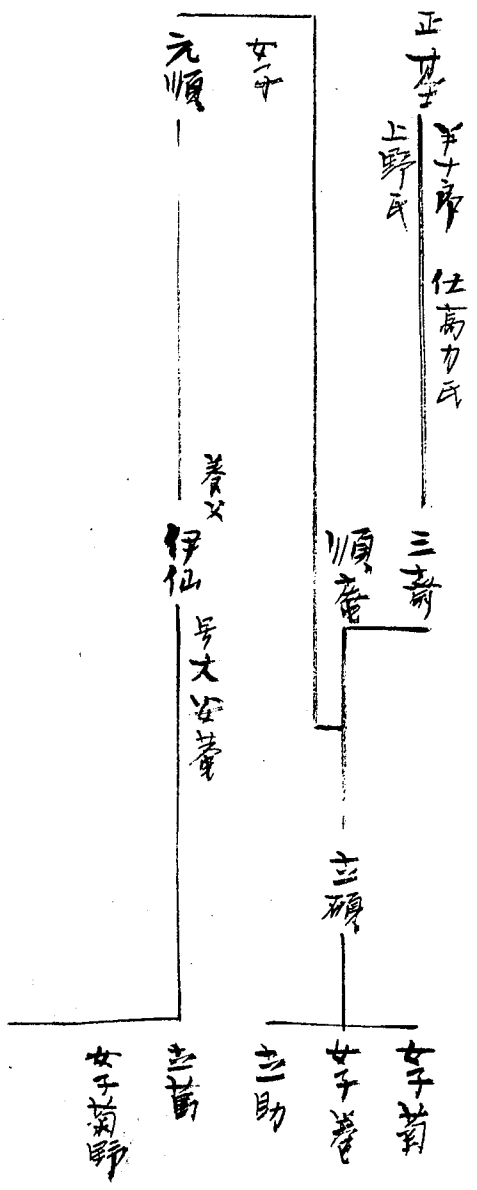
新勝鐵道會社ハ設立セラレタリ、明治三十七八年最後、外界好
況時ナリシカ、上野言フ時ハ其必稟如キナリ、工費ニ至テハ借入金ニ待ツコ
トナリ、社入金ハ盡、如クナラザレバ、セカクハ利息ノ仕拂ヲ負擔セカヘカラ
ズ、収支均衡ヲ得ヤク困難ナリ、大正三四五年ハ至テハ新勝鐵道ノ至境ニ至リ、
津田氏其間ニ社長ニ重責ニ當リ、其時境方極ニ辛苦盡瘁シタルコトハ、
尋常事業ノ家ノ到底及ビ得ザレモノアリトシテ、想像セザルナリ。是故ニ私
財ハ之ニ傾注シ盡シ、其時日ニ在リテハ、家ニ後存ノ物ナリ、負債山積
ト、家外ノ驚キナシニ債務者ニカ履スモノナリ、皆担々々事ハ其ノ現出ル
ニ至リ。是レ事業ヲ以テ生命ヲシテ、私利ヲ顧ミナスルハ作サレシ能ハサルナリ。
津田氏ハ其骨格雄大、其比シテ新宮ニ求ムルニ、原崎作三郎、原崎作右門、
中谷利一、津田清十郎、植村新十郎等數人、指シテ仰スモノニ、之ヲ治

海地、保隆者、家ハハニ比類稀ナ所ニ屬ス。然ル、其壽、比類稀
 長カラシレバ、形爲事件ヲ獨斷シテモ、カ。例、那智山廣澤山林、
 明治ノ初官有、移シテ上地林トナシ、其地、依リ那智山社寺ノ初住氏、

津田氏ニ其ヤコトアリ又其母ニ指テ、信仰スルコト原シ其妻、
 言ニ家ニ異事アレハ必狐ニ姿見ユ志モ其、疑アリヤレハトシテ、
 語レリ家ニ市街ノ中ナリ、狐狸、棲ムノ所ナリ人ハ心ニ信スレハ
 ナンコト、有レモ、ニヤ不思解ナル事也

聖院津林寺延慶士とシテ同隣青原寺の先登ノ類

君の祖と上野正氏とシテ島原城まき力氏に仕
 不略勝左の如し



僧 仙子 教員
仙子 岡山 有之

女子
 女子
 女子
 女子
 女子
 女子

耕道
早春庭 名喜助 又静蓮 海峯 山
 南法匠下 鶴巻津林 若庭 居上

君の初めて後や頁の若山に遊學せられたるは天保十三年
 歳二十一の時一父教員を被一正五年の後より天

保の頃才都市に於いては蘭法匠少く漢法醫猶盛なり時
 代也然るに君は古法の僻地に在りて奮つて所蘭法の
 匠術研究を志せられたるは頗る卓見たりと云ふべし一か身
 君の蘭法匠を學ばれたるは其社島原多か仕へ泰西文物
 に接したるは遠國をたゞたつたるに在り

第々又區々(區)古法蘭法(時代)一上(司)授出た
 る書上の要領也

- 天保十三年五月廿日 和歌山の宮本玄政の入門 (三十一才)
- 嘉永二年六月五日 京都の日野鼎哉の入門 (三十八才)
- 日 五十四月九日 大阪の岡業 (三十九才)
- 安政三年八月廿三日 津路の岡業 (三十五才)
- 文久二年五月三日 串本岡業 (四十二才)

備中藩

侍 岡本 宗順

出陣三年二月六日入陣

京都

中川 大炊

口 五月廿三日入陣

陸奥

青木 村平

口 十月廿三日入陣

とあり其書に「...」といひ知るべきなり

君の書に「...」を見れば其義之の念一に燈を法を尋
たの御意に結を以て同一人との神符と云ふ事希ふこと
ふ。又漢詩を作し國歌の歌一五七字に見る一は「...」のありたり
と云ふは惜む哉故に追て今も其家より存せず
又交友の姓名は士多かりて同く之を知る由なり時 江田の
傳春暉城を大尉の二氏若くは親交あり而して二氏若くは深
く君の人となりか格取せむか始一家に二氏の書に向致通接れ
り之を後子に其趣を知るなり

尚又家蔵書甚多かりしことと其残存せる書目より
之を知る

以上上巻天の就きし之をき、中巻は書料記録を録し合
して記したり（此所古事古記に於て中根七郎）

和語の由来

高池町

今の各大字は高池(元高川平村池ノ口村を合併したるなり)池野山・今津木・月瀬・楠・檜山の六なり

山中の楠・檜山は昔は色川郷に属したり

高池町の中に勢力地は今も高池と云ふは池辺の昔は池野山村たり

池野山村の古名 池村といふは村名の起原を言ふ池は何處

かゝる地名を尋ねたると其らにきくは

紀伊徳島土記の著者も此村名の起原を

村中田畑の字に池田池坂・小池・洞寺の名あり村名の起

是より起る後世村居を各川の辺に於て村をより後を池

ノト是を池の山と呼びしは二箇村と云ふなり

口ト是を池の山と呼びしは二箇村と云ふなり

と断せりて安富たりて若菜と云ふ一

此池田と云ふ大撰津池田城主池田宗後守の子八郎三郎
勝政此池田の嫡子位なりたる事

小池と田家とて慶長の際より未だりて幕府と見ゆ

池田は格人たるべしと云ふ一待す

是等と云ふ大凡織豊時代は通れ来れり由緒あり人々
と思ふ

此地名の起原は詳し言す聊不審も拾り即修永主理

若菜の三子と云ふ事一池田の言の居候一たる事

とのと信すなり

彼の承久の條 池田の言平朝盛の孫河内守保業一京方
此下一録念の事一受け末と監味左と領一と云ふ事

保業と那言上原の坊の善子一たり河の宮の勝山子居候一

弟保則と高川平村に候一たり高川保徳居士記に記さる

高川平村とありて誤り一池田の村に未だ候女氏家子と候

と候一監味左を領有たるもの一若菜一監味左とあり

此池田の事一なり 池の地名と此に起原ありとのと信す

高川平村と其頃 祥源寺裏の山谷に候古寺平池ありと云ふ

池家の徳勤と云ふ事一是の池上の池と云ふ事

池村の通れ未だりたる事

後南や湖の頃 録念の命を受け小山宗隆兄弟郎位三百騎

従一南海を越し領地の善子に候と云ふ事一宗隆は西向河に候

たり保徳年修永主理と記されたり其頃と未だ西向河の村

は落上事候たり 又古田村に未だ候事一居平川向の池に村

(此村未だ池田村と一)の裏に京都の山王神社を勧請して宇藤
神といふなり小山氏に南朝の味方となりて時を交り塩津氏に
従ひ此地方を分領したるものなり

元来塩津を以て前領したるに那智山の領地を以て其社人等之を支配
せしむるなり小山氏に那智山の社人と見ゆ又塩津氏に那智山の
廟の地を領者たれども之は地方の加へるを以て那智山の四郡領
と稱し此辺を領有するものなり

塩津氏に後漸く勢力衰へたるを以て此の地を那智山とせしめ
道に東りたる之位中將手維盛の支族が属し其地を稱した
るより石氏其地を統むる居り其村に古め祥瑞寺の
口を以て稱し其名を以てし其地方を張り小山氏と文り此地
力を領有するに至り

古勢川口の事化 南北朝時代より文禄慶長頃迄の間古勢
川の川口が大變化したるに後末古勢川の古勢村の
前より西向村の山沿を流る神ノ川村を海に注ぎたりとの
説あり古勢川の山沿を築城して古勢海を兩断し其南
に天守とて御先きの居き地を切取して海に入り後末の
川床を河原と化したり此御先地は古勢海の船置場又
は御置場とて大なる用をとり居りての漢字は古勢と
あり古勢より川を經て西向の地たりたり此の地は西向と稱
したる所遂に村名としたりたり

朝鮮の後 小正富川系三氏共々征軍に共歎後時か小山氏に
伴雲若石名を控へたり元の古勢川の川床を隔たりたり此地
居りての古勢地を開拓せりたり人々の中地は此の地等の人也

沿て元の川筋の傍に二石をいれ土を高くして耕地とした
り其地を今も上り地と云ふ又海をたらし海岸線も原由た
りしか後村と云ふ原由と名つけたり

古谷川の復興 古谷川の木筋も近代を事しより西向の例
と土地を耕せの場を有し古谷川筋の方を激流
の後継する川岸侵蝕を要するに至り是を以て古谷川筋
氏と古谷川より池の辺に福次と云ふ海軍工事を
施し崩落を防ぎたり頃と云ふ海軍工事は
古谷川原を築きし

此工事の爲め古谷川筋の例も船着の便大に生
際業を盛んとしり掛籠の根柢也と云ふ懸方も置きたり
廻船も港一廻船回屋を営むもの相違し取て池の川筋と

中間の中流あり古谷川の中流より巨商船を並ぶるを

池の川の和良氏 池の川村の和良村なりと前記の廻船と
かたはち梅天の又流あり和良氏の支族なり和良氏は元禄の比
高松より見え申書岩寺墓地に石碑四基一は和良三郎右
五門者忠、和良三郎右五門福守、老忠の配、和良三郎五門者重
なり

延寶に梅天の縁故深し正成の先か言ふと云ふなりと云
不吉な梅天方、新言に梅天方、西向より同姓ありたり
斯を和良氏の池村と云ふなり古谷川の川筋より川真の
産物を古谷川の真の雲月を送るとしり古谷川漸く盛ん
り居年増加し村落をなすなり池村の口より池の川
の和良の池村と云ふなり梅天の支族なり

若不知田氏一重宗寺の権頭たりし孫子日寺の如録に凡一
たり城外に清水氏あり付居たり起す池口村と近村小重
きをたてたを重りたり

小宮川東二五の移居 津路氏の頃西白子耕地増し古屋川に
渡岸を以て築き大に川下の面目を改めたり於是小山寺と西
向村の今津氏の古所所々榎田に三百年前訖と云ふ
木榎ありたふ金鐘遺線跡に異り一途に陰かたたりと移り又
高川五云十三法寺の所たるを移りたり

昔の又辺路街道 堀・堀川・伊東・神ノ川・古田より池村を経て
付部より上田平・市原・岩根河を過き二河・折ノ川・又諸
を通りたる小峠下也又折ノ川より古所(或は高川東)の古所を
谷より古所の上野の津路を下り下田平を経て市原に至

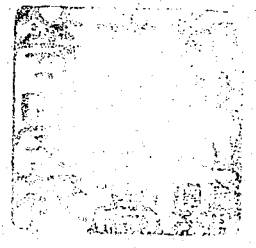
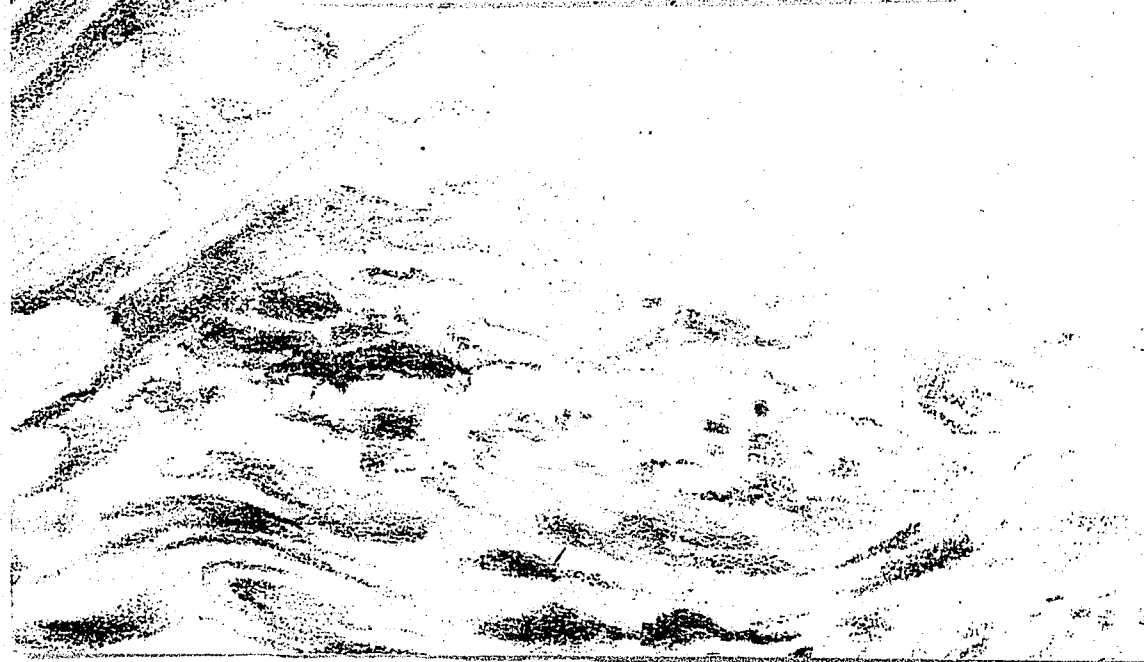
日録に書く事あり

古所川街道 高川東村岩鼻より山道峠峠峠は清水より降り
又より山道又と昔傳より下津木月ノ池が也

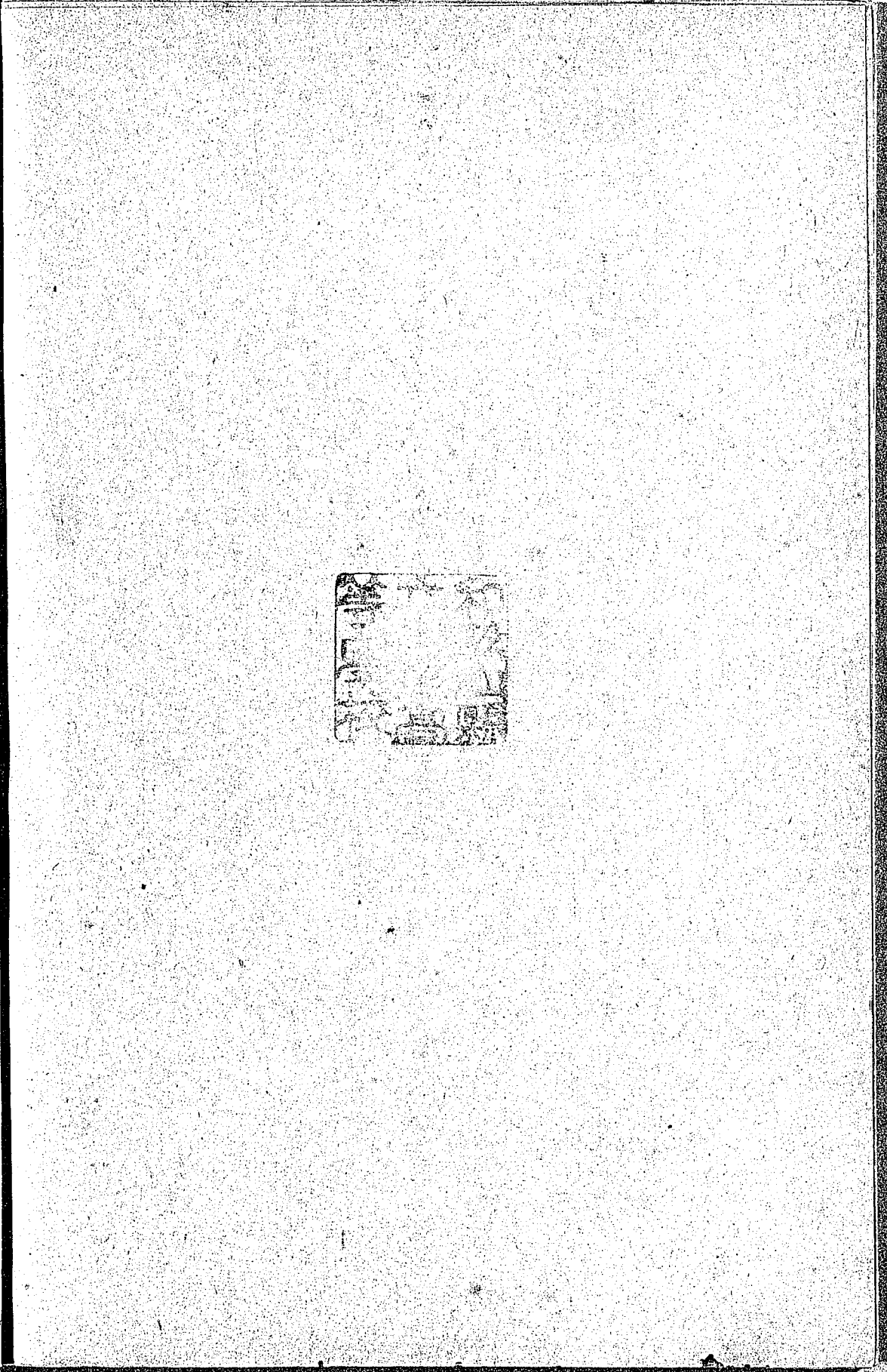
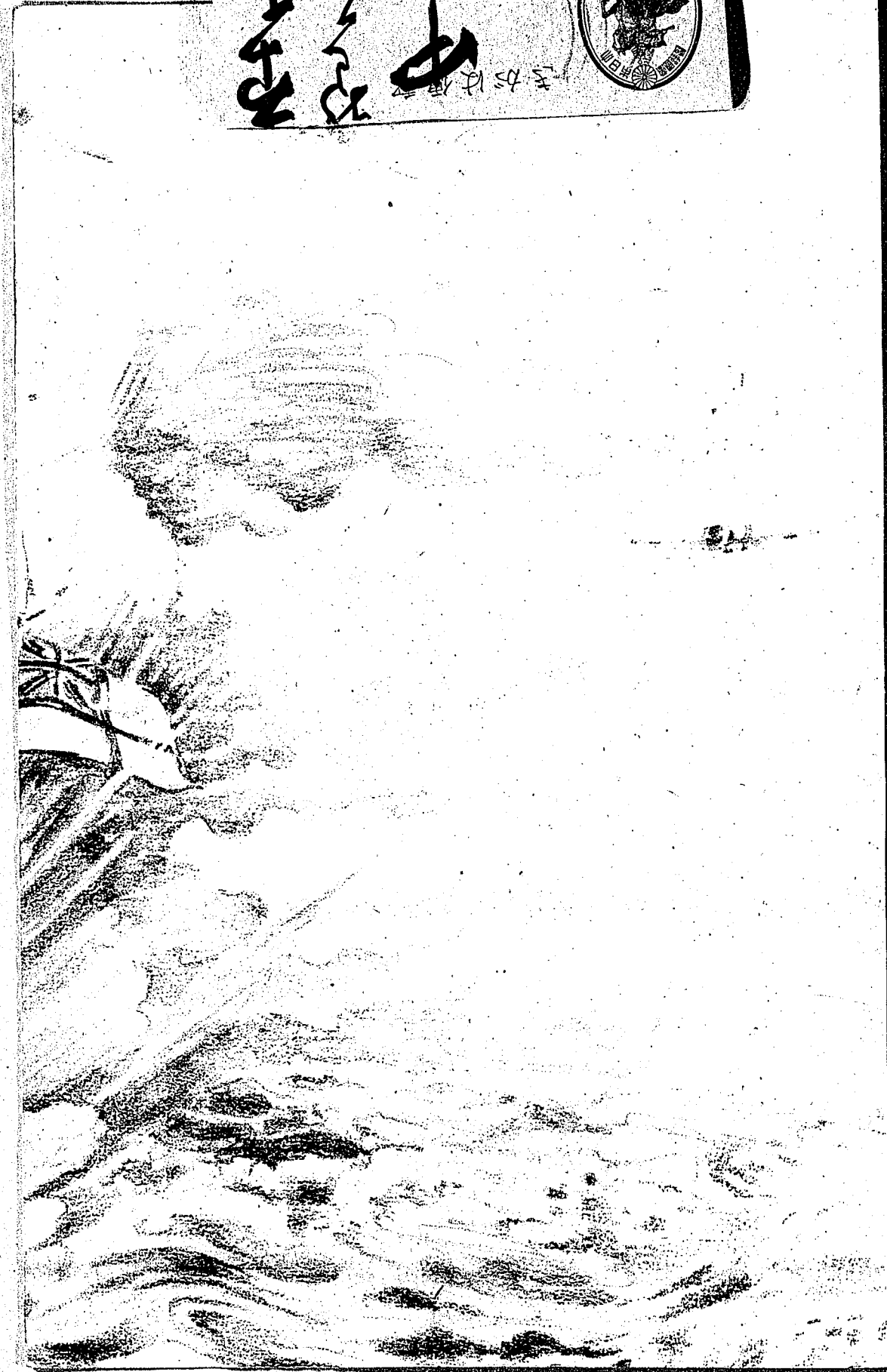
清水及高川東の言地 池口の人衆集りて古地より高川東村が
通事目道不便を感じたり古所より治地壁の中腰に人
馬の道を作りたり池口の衆衆下伴るを如く狭道を新
にたれり清水高川東・地壁を方面き又子存之地を築
き古所寺の基礎を作りたりと云ふ事あり

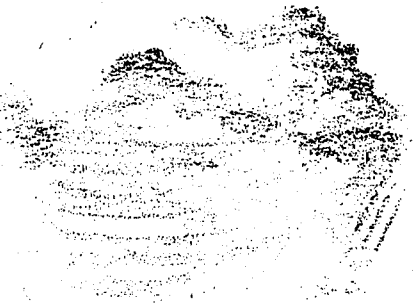
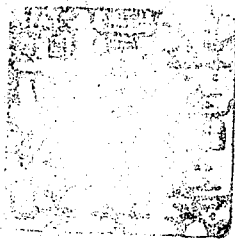
以上は高川東村所在中世古地を往來し一若察したる橋梁
と高川東の後の若所を待つ(昭和三十九年三月廿七日印張)

東方の山々も多し水も清し
是れは我が世に多くの人に
此病に罹りては是れを
是れは向ふとて是れは
有るが如きは是れは
此れを以て是れは
上は少くは是れは
是れは是れは是れは





中根文庫
資料番号
03963





寄るは便郵

山本古座
 中根文庫
 甲子年

寄るは便郵
 山本古座
 中根文庫
 甲子年

